しんらん同人

No.580
5・6 月号

浄土真宗本願寺派　誓願寺
〒171-0052　東京都豊島区南長崎1-3-8
【電話】03-3950-7828　【ホームページ】http://www.seiganji-tokyo.jp/

【 3・4月 ご講師の先生方 】

4/28 米田順昭師

4/14 野村康治師

3/10 内田正祥師

3/24 村田朝雅師

われも ひかりの うちにあり

誓願寺住職　古賀尚之

今月は本願寺出版社発行の「大乗一月号」に掲載されていました文章をお届け致します。（一部変更 文責 古賀尚之）

いのち見つめて

奈良県浄念寺　住職　**中川真昭**

私が放送局の現場にいた三十八年間のなかで、ある少年との出会いを今でも忘れることができません。

『プラスα』というテレビのワイド番組の企画で、難病と闘う少年少女のすがたをとりあげることになりました。

私が担当したのは、筋ジストロフィーという病気でした。当時、未熟な知識しかもっていなかった私は、大阪大学病院を訪ねて、専門の先生から病気について色々な事を教えていただきました。さらにテレビの生放送に出演してくれる少年を紹介してほしいとあつかましいお願いまでしました。

先生は「さあ、闘病生活をおくっている少年は何人かいるが、テレビに出演してくれるか、どうか・・・一週間ほど待ってくれますか」とおっしゃいました。

一週間経って、まちかねて先生に電話をいれました。

「ああ、出演してもいいという少年が見つかった。住所は・・・」

私は先生に教えられた少年の自宅へ向かいました。

十八歳。近藤くんは、明るい少年でした。重い病気と闘っているようには少しも見えませんでした。

取材の打ち合わせを重ねる中で思いもかけないことが浮かび上がってきました。それは、近藤くんにお兄さんがいたこと。そのお兄さんは、同じ筋ジストロフィーで、すでに亡くなっているということでした。

ということは、近藤くんはお兄さんの発病から死に至るまでの姿を、進行を、ぜんぶ自分の目で見つめていたということなのです。

それは、今、自分の病気の状態から、あとどれだけの命であるかをお兄さんの姿に重ね合わせてじっと見つめて、今を生きているということだったのです。

番組の構成を考えると近藤くんの日常生活の映像もほしくなり、数日間近藤くんに密着取材も行いました。

放送当日。約束の時間にタクシーが到着し、車のトランクから車イスを出し、近藤くんを抱きかかえて座らせたお母さんに「私が押してスタジオに行きますから」そう言う私にお母さんは「ちょっと待ってください」と手提げバックの中から一本の紐を取り出し、その紐で近藤くんのからだを車イスの背にぐるぐると巻き付け固定されたのです。「こうしておかないと、車イスがちょっとでもガタンと振動を受けると、そのまま頭から身体ごと落ちますので・・・」

スタジオではスタッフが二十名あまり、近藤くんの到着を待ちかねたように、打ち合わせが始まりました。

台本に従って打ち合わせが進みます。質問事項と近藤くんの答えを確認しながら、秒単位の番組の流れを作っていきます。

決められた時間内に、どれだけの内容を詰め込めるか、視聴者の皆様をどれだけ説得できるか、全てはこの本番前の打ち合わせにかかっています。

全員が番組の流れをつかみ「これで大丈夫」という確認が出来て打ち合わせが終わります。

「それではよろしく」スタッフは最後の調整のためスタジオに戻ってゆきます。

生放送ですから、失敗は許されません。

私もスタジオで最後の確認をしなければなりませんので「近藤くん、放送時間が近づいたら呼びに来るから・・」そういって打ち合わせ室を出ようとしました。すると後ろから近藤くんが「中川さん、ちょっと待ってください。ひとつお願いがあります。番組の最後で、しゃべらせてほしいことがあるんです」

私は近藤くんの顔を見ながら、そんな時間が番組の中ではまったく取れないことを伝えました。そして重ねて言いました「近藤くん、またの機会にしよう」

そのとたんでした。近藤くんの表情がぱっとかわり、その目から涙がぽろぽろとほほを伝わって流れたのです。

「どうしたんや、近藤くん」

近藤くんは、横にいらしたお母さんからハンカチを受け取りながら、しかしそれで涙をふこうともせず「中川さん、ぼくには、またの機会はないのです・・・」といったのです。その言葉を聞いた途端に私は頭をガアンと殴られた思いがしました。

近藤くんを取材し、先生からも話を聞き、その病気の進行状態も知りながら、なんという私だったのでしょう。

私はその時元気でした。一週間先も、一ヵ月先も、一年先も、元気で過ごしている自分を確信していました。それが当たり前だと思っていました。

だから今日できなければ明日やればいいのです。一週間後でもいいのです。またの機会にすればいいのです。

だがそれは、健康な者のおごりでした。

近藤くんだけに、またの機会がないのではありません。私にも、またの機会、明日があるとの約束はないのです。

健康な者も、病気で苦しんでいる者も、老人も、若い者も、子供も、赤ん坊も、みんな一線上に並んで、今、この命を生かさせて頂いているのではありませんか。

私は、近藤くんの涙を見つめながら、番組は失敗してもいい、と思っていました。いや、間違いなくうまくいかないでしょう。番組の最後に時間をつくるためには、

生放送で番組が進行していくその最中に「次の質問をとばせ」「次の質問はやめ」と、スタジオのスタッフを混乱に巻き込みながら、放送を進めていく以外には方法はなかったのです。

番組の最後に、やっと見つけ出した二分ほどの時間に、近藤くんは、「生まれてきたことが。生きてきたことが。こんなにうれしかったと感謝できるように。今限りある命を、精いっぱい輝かせて生きよう。」と同じ病気で闘病生活を送る仲間たちに語りかけました。いやそれは、私も含めた視聴者の皆さんすべてへの語りかけであったのです。

大失敗だと私が思った番組は、大成功に終わったのでした。

番組が終わって、私は、近藤くんに「元気でな」と挨拶し、次の番組取材のために飛び出していきました。

そして近藤くんのことは、忙しさに紛れて忘れていました。

放送からちょうど一ケ月目でした。沢山の手紙やハガキにまじって、近藤くんのお母さんからの封書が届いていました。

「あ、そうやった。近藤くんは元気にしてくれているんかな」私は手紙の封を切りました。便箋のはじめに「息子は亡くなりました。と書かれていました。

・・・亡くなるその直前まで、「僕はもういっぺん中川さんに会うて、謝らんといかんことがある」と言いつづけておりました。「テレビに出してもらった時に無理を言った。そのことをあやまらんといかんのや」と言い続けておりました・・・。

手紙を読む私を、部屋のみんなが息をひそめて見つめていました。その中で私は止めようのない涙を流していました。

謝らなくてはならないのは私のほうです。

手紙の最後には、こう書かれていました。

「いまごろは間違いなしに、待っててくれたお兄ちゃんと一緒に、お浄土で楽しく話をしているでしょう。本当に有難うございました。」

私はそれを読んでまた涙がどっとあふれでました。

そうだったのです。近藤くんの部屋にはたしかにお仏壇がありました。お母さんは朝と晩、そのお仏壇の前に座って近藤くんと一緒に手を合わせ、こういって話しかけられていたに違いありません。

「阿弥陀さんはなあ、いつでも、よしよしと見つめていて下さるんや。私の命のふところに帰って来いよと待ってて下さるんや・・・死ぬのと違う。そこへ帰らせていただくんや。お兄ちゃんも待っててくれる。おじいちゃんも、おばあちゃんも待っててくれはるよ。お母ちゃんも、お父ちゃんも必ずあとからいく。また一緒にそこで会える。もう別れることのない阿弥陀さんの、命のふところへかえらせていただくんや・・・みんな」

そうなのです。近藤くんのあの明るかった表情、そして残された、命を誰よりも輝かせてひたむきに生ききったその姿。それはお念仏に生かされた姿だったのです。

はじめに私が出会ったときの、近藤くんのあの明るかった姿の謎が一気に解けたのでした。

ご法座等のご案内

どなたでもご自由にご参加いただけます。
参加費は無料です。

5月

5・12（日）
■午前十時～
定例法座
【若林唯人師（大阪府）】
■正午～
医療相談
【佐藤公彦医師】

5・19（日）
■午前十時～
なかよしクラブ
（乳幼児から小学生までとその保護者）

5・26（日）
■午後一時～
永代経法要・祥月命日合同法要
【横内教順師（東京都）】

6月

6・9（日）
■午前十時～
定例法座
【井上大乗師（新潟県）】
■正午～
医療相談
【佐藤公彦医師】

6・16（日）
■午前十時～
なかよしクラブ
（乳幼児から小学生までとその保護者）

6・23（日）
■午後一時～
定例法座・祥月命日合同法要
【濱畑慧憭師（大阪府）】

編集後記

・本願寺出版社に「大乗」の一部転載をお願いしたところ、快諾いただき今号に「いのち見つめて」が掲載できました。感謝致しております。

・大学卒業五十五周年。同期会の２２名が山口に集まりました。卒業生１６８名のうち、物故者２７名、不明者１９名。取り壊された校舎や学生寮、汗を流したテニスコート等々、時の流れを懐かしむ自分がいました。身体が動くうちは青春です。元気をもらって帰京いたしました。

・副住職も少しづつ布教活動の場が出来てきました。ご自宅での法要にも積極的にお参りし、仏法をお伝え出来ればうれしいことです。

〔法話をする副住職の様子〕